

# 多様な価値を包摂する A/r/tography の試み

— Narrative by three pictures project in Hiroshima を通して —

池田 史志<sup>1</sup>・森本 謙<sup>1</sup>・マルジエ モサバルザデ<sup>1</sup>  
新井 馨<sup>2</sup>・会田 憧夢<sup>3</sup>・生井 亮司<sup>4</sup>  
(2020年10月5日受理)

A/r/tography Attempted to Include Diverse Values  
— Through “Narrative by three pictures project in Hiroshima” —

Satoshi Ikeda, Ken Morimoto<sup>1</sup>, Marzieh Mosavarzadeh<sup>1</sup>,  
Kaori Arai<sup>2</sup>, Domu Aida<sup>3</sup> and Ryoji Namai<sup>4</sup>

**Abstract:** The five participants in this study walked through Hiroshima Peace Memorial Park and its neighborhood and created a narrative based on three photographs using the A/r/tography method. They emphasized the images and thoughts evoked by the walk—encountering people, things, and events—and autonomously developed themes, purposes, expression media, and description methods. Each participant selected and discussed an arbitrary context from among the multilayered awareness and inherent themes. This study proposed the use of photography as a medium for inquiry in art classes.

**Key words:** A/r/tography, Arts-Based Research, photography, inquiry, walking  
キーワード：アートグラフィー、アートベースド・リサーチ、写真、探究、ウォーキング

## A/r/tography とは

教育研究の中には、一般的な社会科学的研究方法と異なる方法で仮説を立て、研究を実践し発表する研究分野が存在する。その中でも、主にエリオット・アイズナーによるビジュアルアートを用いた教育研究の再概念化の働きをきっかけとする、A/r/tography（以後、アートグラフィー）や Arts-Based Research（以後、ABR）など、アート自体を研究として捉える研究活動の事例が世界的に増えつつある（Eisner 1979;

1991）。

アートグラフィーの、A/r/tとは、芸術家（Artist）／研究者（Researcher）／教育者（Teacher）を表し、その三つの有様の関係性から生まれる知に注目した、生きる探求（living inquiry）を実践的に追求する、アートを基盤とした教育研究方法の概念である（Springgay et al., 2005, p. 899, 902; LeBlanc et al., 2015, p. 371）。生きる探求とは、思考や過程の可能性を重視することから、常に物事の現状よりその傾向や可能性について問うことを好む（Irwin et al., 2018, p. 40）。すなわち、アートグラフィーとは、アートを基盤とした生きる探求であり、非線形的、創造的、且つ表現的な過程からつくられる「可能性の理論」である（Sullivan, 2006, p. 19）。例えば、美術教育研究者が実践を行う際、それは本人の教育者（Teacher）としての経験や思い、芸術家（Artist）としての美的な活動と理解、そして研究者（Researcher）としての知識

<sup>1</sup>ブリティッシュコロンビア大学カリキュラム教育学部博士課程後期

<sup>2</sup>大阪教育大学 / 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

<sup>3</sup>今治市立朝倉小学校

<sup>4</sup>武蔵野大学

や視点などが、研究の発展や、過程、そして解釈によってかたどられ、相互的な知覚が働く。しかし、ここでいう芸術家、研究者、教育者とは、学校や研究機関などの専門家だけをさすのではなく、広い意味でのアートによる表現や学校の外で起こりうる学習も含まれる。アートグラフィーは芸術家、研究者、教育者の間を変化しつつ生きながら、それぞれの役割の違いや関係性を感じ取り、新たな理解を生み出すことが目指されている (Irwin, 2004)。

(森本 謙)

## Walking と A/r/t

### 国際共同研究プロジェクトとしての Mapping A/r/t

本研究は、ブリティッシュコロロンビア大学のリタ・アーウィンを代表とする、カナダ、アメリカ、オーストラリア、スペイン、中国、日本の美術教育研究者によって組織される国際共同研究プロジェクト、SSHRC (890-2017-0006) 「Mapping A/r/tography: Transnational storytelling across historical and cultural routes of significance」(以後 Mapping A/r/t)の一環として実施された。Mapping A/r/t は、アートグラフィーの国際的な理解や実践の促進を目的としており、日本でも、美術教育研究者や美術教育者がその研究と関わりを持ち、日本ならではの理論化や実践に取り組んでいる。Mapping A/r/t における日本チームの代表は東京学芸大学の笠原広一が務め、科学研究費補助金基盤研究 (B) 「Arts-Based Research による芸術を基盤とした探究型学習理論の構築」(以後、ABR 探究研究) と連動して複数のプロジェクトを実施している。笠原らの研究メンバーは、2018年には世界遺産熊野古道で Walking をテーマとしたアートグラフィーを実践し、2019年にはカナダ、ブリティッシュコロロンビア大学で開催された InSEA (International Society for Education through Art) World Congress in Vancouver で、シンポジウムや口頭発表、さらに作品発表を通して研究成果を公表している。また、国際学会終了後も Walking の多様な解釈の探究を目的として、演劇的手法を用いたワークショップの開催や、東京、新潟、千葉での科研メンバーによる発展的な研究を行っている。笠原の ABR 探究研究の目的の一つは、アートグラフィーを含む学校教育現場への ABR の導入可能性を探ることであり、幼稚園教育要領や小・中・高等学校学習指導要領との整合性を踏まえながら、新しい時代に向けた美術教育の在り方が実験的に検討されている。

(森本 謙・池田史志)

### Narrative by three pictures project in Hiroshima とは

本編で実施したプロジェクトは、アーウィンの Mapping A/r/t 及び笠原の ABR 探究研究の継続研究の一つとして位置付き、参加者が広島平和記念公園とその周辺を歩くことを通じてアートグラフィーを実践した。「Narrative by three pictures project in Hiroshima」(以後、広島プロジェクト) は、参加者が3枚の写真と共に「語り」をつくる実践研究である。参加者は、大学教員2名、ブリティッシュコロロンビア大学博士後期課程でアートグラフィーを用いた研究を行っている大学院生2名、広島大学大学院博士前期課程院生2名、筆者の合計7名であった。実施スケジュールは、2019年11月29日と30日の2日間であり、29日には、広島大学東広島キャンパスで「ABR (Arts-Based Research), A/r/tography とは何か—多様な価値を包摂できる学校教育実践への接続を視野に—」と題するセミナーを開催した。セミナーでは、森本氏によるアートグラフィーのレクチャーとディスカッションを行い、アートグラフィーの理解を深めると共に、広島プロジェクトの目的や方法を参加者で共有した。30日には平和記念公園を訪れ、午前中は参加者全員で原爆ドーム、原爆の子の像、原爆死没者慰霊碑、平和記念資料館を一通り巡り、午後からは各自の関心に基づいて自由に行動して写真撮影を行った。撮影後には再度集合し、参加者が撮影した写真の中から任意の3枚を選び、写真選択の意図及び各参加者のその時点での関心や気づきを発表し、意見交換を行った。その後は、各参加者の所属機関に戻り執筆を行った。

広島プロジェクトにおけるアートグラフィーでは、その場所を歩くことや人・もの・ことなどに出会うことで想起されるイメージや思考を重視し、参加者が自律的にテーマ、目的、表現媒体、記述方法を決定した。探究の深化に伴い、歩くことを媒介として発展的にテーマが変更されてもよく、あくまでも参加者の自己変容と参加者間での相互の学びを重視した。

今回訪れた平和記念公園は、原爆ドームや平和記念資料館など、世界遺産を含む多層的な意味を有する強いメッセージを内包する場所である。その一方で、そこに暮らす人々の日常もあり、同じ場所でも国籍や文化的背景の違い、年齢、そして参加者固有の視点や関心の違いによって場所への認識は異なる。広島プロジェクトでは、それらの認識をステレオタイプに収束させるのではなく多様な問題設定や表現に昇華させ、参加者が固有の文脈を生成することを重視した。今回用いた“写真”には、現地で撮影した写真、ウォーキング終了後に制作した作品の写真、収集した資料、関連するイメージの写真などを含み、“語り”には、論述、



物語、批評、詩、散文などを含んだ。ただし、写真と語りとが相互に関連することを条件とした。

現在、アートグラフィーは主に大学等の高等教育機関で実施されている。広島プロジェクトでは、アートグラフィーの具体的な実践を成果として示すとともに、笠原の ABR 探究研究の目的に基づき、幼児教育及び初等・中等教育機関での実践を想定したカリキュラム開発のパイロットとして実施し、主に小学校の図画工作や中・高等学校の美術の授業における、探究活動を促進する、写真を用いた新たな学習の可能性を検討した。

(池田史志)

## A/r/tography

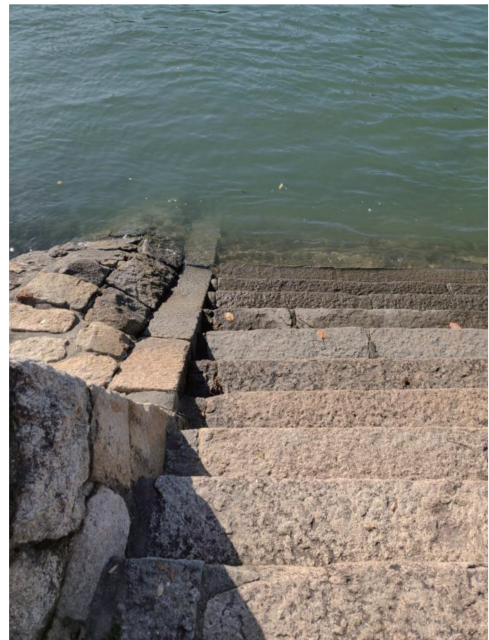
空の青とフレームと見えないものについて

Marzieh Mosavarzadeh



私は一枚の写真を撮った。誰かにこの写真を見て何があるか問いかけてみるならば、おそらくまず気が付くのはドーム状の廃墟である。そして、骨組みだけとなったドームを通して青空のグラデーションが目に入る。同じようにたくさんの窓ぶちには窓ガラスも、それに反射するものもない。また、廃墟の壁に刺す鋭い影について話すかもしれない。しかし、この写真を見るだけでは、フレームの外にあるあらゆる建物の角度や異常に暖かい秋の影響で青葉を掲げている木々を

見ることはできない。フレームの中には、被爆者の為に添えられた数々の花束も写っていない。ドナル・オドノヒュー (2018) は、写真について、何か大きなもののカケラであり、見えるもののごく一部を写すものでありながらも何かを伝えているのだと述べる (p. 72)。そこで、私は写真のフレームの外にあるもの、すなわち写真だけを見る者にとって見えないものについて考える。写真とは、写真の中にあるものと関連しながらフレームの外にあるものについて関心をもつための招きかけなのである。



チームメンバーと共に原爆ドームから資料館へと向かう。彼らから広島歴史について話を聞きながら太田川に沿って平和記念公園内を歩いて行く。それは、本や映画で見たものや語り継がれてきた話である。煮えたぎる川に入って溶け落ちる皮膚を和らげようとした被爆者たちの姿や、あの悪夢のような日から今でも川底に潜む破片やかけらについて。川の両側に階段がある。川の青に消えていく階段の終わりを見ることは難しかった。川の近くまで行くことができたが、川底を見ることはできなかった。この階段の写真を撮りながら、取り残された被爆者についてふと考える。見えるものと見えないものの中に潜むもの。写真からは、階段全てを見ることはできない。しかし、水面を通して見えないからといって、そこに実在しないわけではないのである。見えるものはまたそこにはないものなのである。



平和記念公園の近くにある路地裏で割れた曇り窓を見つけた。割れ目の隙間からその後ろにも窓があることがわかる。この窓の後ろには幾つの窓があるのだろうか。一つの窓は何枚の窓からできているのだろうか。『Hiroshima: Whose story is it?』の著者達は、世界中の子供達に原爆のことや平和の重要性について教えるためにある数々の物語には歪みがあり、歴史の生傷を残しているのであるという (Yurita & Dornan, 2009, pp. 230)。百合田真城人とドルナン・リード (2009) は、真の理解を妨げるような一つの総合的な理解ではなく、あらゆる視点から広島と長崎に落とされた原爆について学び覚えることを進めている (p. 236)。これは写真が全てを写すことができないことと同様である。フレームの外を見ることによって他の語り口と取り組む必要があるのである。語り手の声と写真家がフレームを定めることは似ているのではないだろうか。

オドノヒュー (2018) によると、写真を撮る際に行う判断は何かと立ち会う手段として理解することが可能である。写真は、作り手の見方や想い、動機、躊躇、予測、興味、あるものを記録する欲の現れである (O'Donoghue, 2018, p. 76)。この日は、平和記念公園を歩きながら様々な視点から立ち会ったものから幾つかの写真を撮った。その出会いや会話が歩く先を定め、写真を選びながら本文を書くことで現れた道に対する

応答を形づくるのである。私の写真は、過去に起こった出来事に対して多数の意味を求めるために好奇心を高め、語られるもののフレームの外を覗き、未知の可能性に応じることを励ます教育的な応答なのである。

#### 美術教育の爆心地

森本 謙

広島平和記念資料館には、原子爆弾が落下した場所を示すインスタレーションがある。それはとても刺激的なものであり、いかに1945年の広島に生きていた人たちの日常を一瞬で変えた歴史的に重大な出来事であったのかが明らかである。その映像を見ていると、今まで平和記念公園を訪れた時に気にならなかったものが目にとまる。それは「爆心地」である。これまでの平和記念公園でのルートは原爆ドームから始まり、他の観光客や修学旅行生たちと共に資料館に向かうものであった。周りの人たちが歩く流れを見る限り、この道筋は一つの正解なのであろう。また、平和を祈念することを考えるならば、原爆そのものに焦点を当てずに、被爆者たちの物語る被爆の影響を知ることは正しいとも言えるであろう。

しかし、今回の Walking では、爆心地を探し、資料館から爆心地へむけて、これまで歩いてきたルートを逆戻りするように歩いた。爆心地に向かって歩くと、日本のどこにでもあるような路地に行き着く。手前には内科医院があり、それを取り囲むように立体駐車場や小さい店がある。その場所の重大性を示す唯一の看板がなければ、なにも考えずに通り越してしまうかもしれない。写真を撮影するために大勢の人が集まるすぐ近く原爆ドームと比べ、通行人もほとんどいない。通りすぎる数少ない人たちは、その看板を見ると、「ああ…ここが…」と口ずさむ程度で、写真も撮らずに次の行き先へと歩いて行く。そのような光景を目にしながら、さらに垂直方向に爆心地へ近付いた。内科医院に隣接している八階建ての立体駐車場の屋上まで登る。するとまたありふれた駐車場の屋上の風景が待っていた。ここにはさらに看板もなく、行き来する通行人もいない。ここが爆心地に最も近い地点と知らなければなにも感じないのだろう。現に、沢山の観光客がそこに車を止め、原爆ドームや資料館へと足を運んでいるのであろう。しかしそこは、どこにでもある日常的なものと、どこにもあってはならない非日常的なもの両方に最も近い場所なのであった。その両者の間に一人で立ちながらふと恐怖を感じる。それは、もしもあの日、ここに立っていたのであれば、自分がそこにいたことを物語るものは何一つ残らないからだ。





図1 爆心地前



図2 立体駐車場の屋上へ



図3 爆心地上空

原爆ドームから資料館への道があるように、人の興味や意思、能力、環境や社会との関係性から流れが出来上がる。そのような流れは学校教育の現場でも存在するものであり、学習指導要領や地域社会の現状など、あらゆる影響によって左右される。そして、それに適合するように現場に立つ教師の姿が求められる。しかし、示された指示に対したただ従うことが教育なのであ

ろうか。

チャールズ・アンゲルレイダー（2003）は、学校の管理職につくものや、そのような役割を持つ教師などについて、教育現場の複雑な現状やニーズに気がとられ、本来の役割を達成することができなくなっているのではないかと述べている（p.223）。それでは、美術教師はどのようなのであろうか。アンゲルレイダーの教師と同様に、美術をすることを忘れていないのだろうか。ここで言う美術教師による美術の放棄とは、独自の制作活動の停止や、周囲の様々な要求に合わせるように美術教育をすることから、そもそもなぜ美術を教えようと思ったのかを忘れてしまうことを意味する。教育現場とは、複雑な環境であり、そこに立つものは常に葛藤する思いや現状の調和を図ろうとしているのである（Leggo, 2019, p. 41）。アートだからこそ一度踏みとどまり、原点に戻ってもいいのではないだろうか。また、そのような想像的な可能性は、美術に秘められた学習の可能性の側面の一つでもあるのではないだろうか。

意味の場である「広島平和記念公園」-「歩く」から -  
新井 馨

広島平和記念資料館の中に、焼け野原となった広島  
の地にがれきの中から開花したカンナの花の写真が掲  
示されてあった。その写真とともに次の言葉が印刷さ  
れていた。

その秋、「75年間は草木も生えない」といわれた  
広島で新しい芽が息吹きました。焼け跡によみが  
えった緑に人々は生きる勇気と希望をとりもどし  
ました

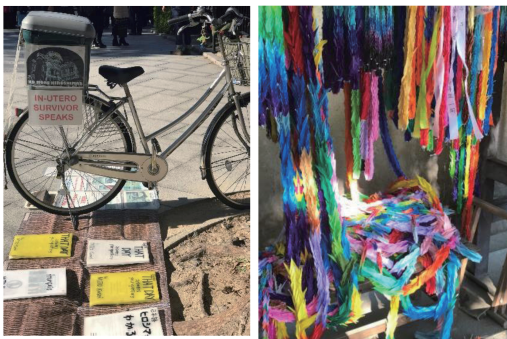
1945年8月6日 午前8時15分、広島市上空で閃光  
が走り全ての生物や建物を焼き尽くした。その直後に  
自生した植物はマツタケであったとも、ハマユウで  
あったともいわれている。いずれにしても核兵器は全  
ての生命を破壊する力を持ち、その恐ろしさを後世に  
伝えていく。「広島平和記念公園」とは直接的な意味  
をもつ場所であることは周知のことである。こういっ  
た人類の平和を考えるための重要な場所で「歩く」こ  
とを通し、自分に何ができるのであろうか、またそれ  
を言語化することのおこがましさに躊躇しながら、手  
探りではあるが整理してきたことを3枚の写真ととも  
に記していく。これらの写真は、「歩き」ながら感覚  
的に足がとまったものを撮影したものである。広島平  
和記念公園という「場」を「歩き」ながら思考を巡らせ、  
撮影した写真からまた新たな考えを巡らしていく、と  
いうことを繰り返して行った。

2019年11月某日、原爆記念ドームから「歩き」はじ  
めた。天気は快晴、冬の訪れを感じるひんやりとした

気温であった。歩く道には赤や茶色、黄色の落ち葉があったが、公園内を清掃するボランティアの人たちが道端に箒で寄せていた。竹ぼうきと道路がこすれる「じゃっ、じゃっ」という規則正しいリズム音が自分の歩くペースと重なる。リズム音と重なった私の「歩き」は、「広島平和記念公園」から自身の内の世界へといざなった。時折吹く風に落ち葉がまい、竹ぼうきのリズム音が乱れる。そのリズムと自分の歩くペースのズレが、私を「広島平和記念公園」へと引き戻す。多くの観光客や修学旅行生、ガイドの人、犬を連れて散歩をしている人が公園内に存在していた。ある人は核廃絶を訴える署名活動を行い、ある人はアコースティックギターで演奏を行おうと準備をし、またある人は自身の経験を語り、多国語に翻訳したファイルを表示していた(図4)。74年前のあの日、多くの人々が無残にも命を落とした場所に、時を経て人々はまた集う。各々の心中にある経験や思いと、物理的存在としての「平和記念公園」という場との関係は均質ではない。

また、この場所は平和を考えるための教育材料の場としても利用される。当日もいくつかの学校がガイドにつれられ、熱心にノートをとりながら学習していた。現在でも校外学習や修学旅行に広島を訪れる学校も多く、その痕跡は公園内に納められた学校名が記された千羽鶴からも想像に固くない(図5)。

このように原子爆弾が投下されたという事実を持つ広島平和記念公園ではあるが、その場がもつ意味は多種多様である。「署名活動の場」である人や、「ペットを散歩し憩いの場」である人、「自らの経験を語る場」、また「学習される場」、あるいは凄惨な記憶から足を運べない人もいるであろう。マルクス・ガブリエル(2018)の提唱する新実在論では、「存在するものは、すべて何らかの意味の場のなかに現象」(p. 130)



(左) 図4 個人的意味としての場

(右) 図5 教育・学びとしての場

すると述べられている。広島平和記念公園が抱える場の意味の多様さから考えると、もはや「広島平和記念公園」は物理的に存在しないのかもしれない。そして、そこにあるのは時間によって構築された人々の想いなのかもしれない。広島平和記念公園を訪れることで自身の中に何かをみることが、「広島平和記念公園」が存在しうることになるのだろうか。

後日、撮影した写真を振り返りながら3枚目の写真を選ぼうとしたとき、ある種の構築されたイメージの中、要求された思考を巡らせているような感覚におそわれた。誤解を恐れずにいうと、広島平和記念公園という場が、ある種定められた社会的概念の場、ということである。広島平和記念公園という「点」と、そこから想起される原爆という言葉、人々の想い、時の流れといったそれぞれの「点」へと直線的な思考が「歩く」という行為から生まれた。そしてその直線的な思考は、「平和記念公園」を様々な意味をもつ場へと変容させた。しかし、変容した「広島平和記念公園」はさらに私に疑問を投げかけた。図6の写真には「原爆被爆60周年記念植樹」と彫られた石碑がある。そしてその後には、草花が鬱蒼と茂り四方八方斜めに倒れ掛かっている。この風景を見る限り、石碑に彫られている記念樹に該当するような木は見当たらない。ひょっとしたら記念樹は、石碑の背後に広がる鬱蒼とした草花の中の一つなのかもしれないし、植樹された木がなんらかの理由で伐採されたのか、この一枚の写真からは判断しづらい。しかし、大事なことは「歩く」行為を通して、その「場」の意味の立ち上がりによって、この



図6 社会的概念の場

3枚目を選んだということである。

広島平和記念公園を「歩く」ことで立ち上がった、意味の場である「広島記念公園」なのである。歩く行為と私と場との相互的行為から、「私にとっての平和記念公園」が立ち上がってきたということを示したかった。

ものの本質に迫る「歩く」

会田憧夢

広島市に位置する平和記念公園には、世界の平和を願うための建物や資料が集まっている。施設全体は平和記念公園内にあり、図7のように、原爆死没者慰霊碑や平和記念資料館などがある。





図7 平和記念公園案内板



図8 平和祈念館案内板



図9 平和記念資料館案内板

ここで目を引くのが、2種類の「きねん」の存在である。どちらも読みは「きねん」だが平和記念公園、平和記念資料館には「記念」が、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館には「祈念」が使われている。図7、図8、図9で分かるように、「平和記念公園：Peace Memorial Park」、「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館：Hiroshima National Peace Memorial Hall for the Atomic Bomb Victims」、「平和記念資料館：HIROSHIMA PEACE MEMORIAL MUSEUM」と全てに“Memorial”の単語が使われている。

日本語では使い分けているにもかかわらず、英訳すると同じ単語が使用される。この背景には各言語の文化的違いや建物を建築することになった歴史などが関わると考え、調査した。

まず平和祈念展示資料館のHPを閲覧し、「祈念」の英訳で使用されている単語を調査した。その中の「平和祈念展示資料館とは」には、「平和祈念展示資料館は、戦争が終わってからも労苦（苦しくつらい）体験をされた、兵士、戦後強制抑留者、海外からの引揚者の三つの労苦を扱う施設です」と書かれていた。つまり、この資料館では主に戦後に苦労された人々のことを思い願う機会を与えるということである。上記を

そのまま英訳したものはなかったが、資料館の説明には「Memorial Museum for Soldiers, Detainees, in Siberia, and Postwar Repatriates」と書かれていた。案内板と同じく、「祈念」が「Memorial」と訳されていた。やはり、日本語では「記念」と「祈念」の2種類あるものが「Memorial」の一単語で訳されているようである。

平和記念公園などの平和に関する建造物や資料が多く存在するのは、1949年に制定された広島平和記念都市建設法が大きく関わる。この法律は被爆後、廃墟と化した広島市の復興のために制定されたものである。第2条には以下のように記されている。

第2条 広島平和記念都市を建設する特別都市計画（以下平和記念都市建設計画という。）は、都市計画法（昭和43年法律第100号）第4条第1項に定める都市計画の外、恒久の平和を記念すべき施設その他平和記念都市としてふさわしい文化的施設の計画を含むものとする。

Article 2 Special town planning for the construction of Hiroshima Peace Memorial City (hereinafter referred to as the Peace Memorial City Construction Plan) shall include, in addition to the planning provided for by Article 4 of the Town Planning Law, planning of facilities to inspire the pursuit of lasting peace and such other cultural facilities as would befit a peace memorial city. (下線は筆者による)

原文の「恒久の平和を記念すべき」という箇所が、英訳では「to inspire the pursuit of lasting peace」となっている。つまり「記念」が「inspire」という単語で表現されている。「inspire」とは、「鼓舞する、激励する、発奮させる、鼓舞して(…を)させる、鼓舞して気にさせる、起こさせる、吹き込む、鼓吹する、靈感を与える、(…を)示唆する」とされる。直接的に「記念する」という意味はなかったが、「起こさせる」や「鼓吹する」などの意味が近いだろうか。平和を何とか達成したい、その発端をこの法律で果たすという想いが込められてこの単語が使用されたことが推測できる。

また、広島市で毎年8月6日に行われている平和記念式典について、広島市HPでは以下のように説明され、英訳されている。

原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するため、平和記念公園の原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）前において、原爆死没者の遺族をはじめ、市民多数の参加のもとに平和記念式典を挙行しています。

Every year, the City of Hiroshima holds the

Peace Memorial Ceremony to console the souls of those who were lost due to the atomic bombing, as well as pray for the realization of everlasting world peace. (下線は筆者による)

ここでは「世界の恒久平和を祈念する」という文が「pray for the realization of everlasting world peace.」と訳されている。「pray」は「～のために祈る」「心から願う」を意味する。

以上の2例から考えると、資料館などの名称に使用されている「きねん」には「Memorial」が共通して使われているが、前後の文脈によって単語の意味内容は変化するようである。

本稿では、日本語の「きねん」と使用されている英語の違いについて述べた。これまで、平和記念公園の存在はもちろん知っていたが、戦争や原子爆弾にかかわる施設に「記念」の文言が使用されていることに違和感を覚えていた。しかし、今回実際に平和記念公園や周辺施設を実際に訪れ、歩いたことによって、その雰囲気と歴史的背景から「記念」に込められた思いを感じ取ることができた。頭の中のイメージと、歩いたことによって感じたことには差がある。実体験によって手に入れることができる感覚やイメージはどれだけ知識を詰め込んでも得ることができないものである。ものの本質に迫るための「歩く」ことは重要なステップである。

「歩くこと」の困難と自由—意味からの逃走, 象徴から普遍へ

生井亮司

周知のように広島(Hiroshima)は歴史的にも人類史的にも重要な意味を内包した場所であり、平和記念公園、そして原爆ドームはその象徴でもある。また、核の問題は今日でも引き続き、問われ続けているアクチュアルな課題である。そうであるから、広島を歩く、そして写真を撮る、ということには、気負いや畏れがあったと述懐しておかねばならない。そのため、広島とは何か、広島で何を撮り、受け取るのか、さらにそこから何かを語ることができるのか、という問いは広島へ向かう車中から、いや今回の滞在が決まった時から始まっていたことになる。私が、「広島を引き受けること」はということなのだろうか。しかし結論を先に述べてしまえば、結果として、広島を引き受けるなどということは到底私にはできなかったということになる。

さて、ABR、アートグラフィーとは何かということには様々な解釈があるが、本稿では、ある探究活動にアートを介在させることによって世界の意味や真理を掴み取ろうとする一つの方法と理解してみる。つま

り科学的なそれとは違ったアートの仕方で、ということである。一般的に科学的な探究は対象を分節化、細分化することで、そのものの構造や意味、真理を明らかにしようとする。その観察者は、いわば対象の外部という不変な超越論的立場に立ち対象(物質)の変化を観察しようとする。しかしながら、物質を細分化し、素粒子やクオークといった単位に分節しようともそこに物事の真理が描かれているわけではないし、そもそも透明な主体となって、対象の外部に無関係に立つことなどできない。むしろ私たちにとっての対象の意味は無限に析出し続け、どこまで分解しようとも対象の意味や真理にはたどり着けることなどできないのであるということが理解されるばかりである。また、こうした態度が近代的合理性や再現可能性への信頼によって生み出されたものであることに説明の余地はない。

一方、どこまでも対象を分節しようとも、意味の網の目から取りこぼされてしまう世界の残滓をも掬い取ろうとする態度がアートの世界を引き受けていく態度であり、アートによる探究、リサーチの技術であると位置づけてみたい。こうしたアートの探究とは科学的な探究とは対照的に探究をするもの自身が関係性の中に内在することで遂行される。ティム・インゴルド(2017)は、ものを作ることに於いて、思考を形式に当てはめるような質量形相論を乗り越えるべく、作ることを通して知識を作り上げるような知性のあり方を次のように述べている。「探究の技術において、思考は、わたしたちがともに働く物質の流れやその変動に絶えず応答しながら、それらとともに進行するように振るまう」(p.26)。こうした探究の技術はアートにおける探究にも当てはめることができる。アートの探究とは、対象や関係、あるいはその場所に巻き込まれることが要求されるのである。言い換えるならば、対象や場所の生に応答しながら巻き込まれていくような態度である。

以上のようにABR、アートグラフィーの探究を理解した上で、広島を歩いた経験をふりかえる。先述したように、広島は歴史的、人類史的にも「重要な意味」を持つ場所であると同時に多層的に意味が折り畳まれ、絶えず意味が生成され続ける場所である。そうであるから、私は、そこで生成される意味を探ろうと、あるいは発せられている問いかけを聞き取ろうとしていたように思う。しかし、意識すればするほど、そこで発せられるメッセージを聞き取ろうとすればするほど、聞こえてくるものは、すでにどこかで聞いたことのあるような物語なのである。つまり、それは広島に来る以前から知っていたもの、私の意識、いや知識に

よって作り出されたものであったのである。だから私が撮影するものも、いわゆる広島がわかりやすく語られるもの、モニュメンタルで象徴的なものであったのである。もちろん、すでに語られているものが語るメッセージは強く、「重要な意味」を持っていることは確認しておかねばならない。

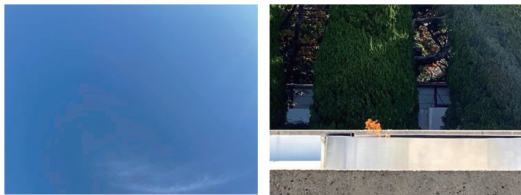


図10 変わらないが変わり続けているもの

しかし、そうした広島を撮ることになんらかの違和感を感じていたことも確かなことである。この違和感とは、どこかで自分が外から広島を理解しようとしているような、距離や俯瞰を感じさせるものであった。ところが、そうした広島を撮る一方、歩き続ける中で、撮影していたものがある。それらは3枚の写真(図10)として示すように、どこでも同じように見ることのできる水や空、炎といった揺らめくものである。こうした現象はその場所や時間に内在することなしには得ることはできないものでもある。それは、あたかもパウル・クレーの線が散歩のように時間に内在するかのごとくである。

インゴルドが徒歩旅行と輸送の違いを明らかにしながら、輸送が時間に逆らうのに対して、歩行は時間に内在することであると述べているように、歩くことが時間への内在、そして生成の運動へと随伴することを可能にしたのである。また、それまで、外部から意味的に捉えようとしていた世界との関わりから、自らの運動(散歩)を通して生成し、変容する世界へと参与することは、意味の境界を弱め、世界と共に変容する

自己を可能にするのである。

しかしながら、はじめから、意味が解体された世界に内在することができるわけではない。意味を抱えながらも、意味を手放していく、という、その動きを経ることなしには、世界そのものへと内在することも、また不可能なのである。そして、その動きを支えるのが歩くことであり、身体性に身を委ねていくことではないかと考えている。

## 人が／歩き／ものやことを／撮影し／記述することの“可能性”

新唯物論(New Materialism)の論者であるカレン・バラードは、思考と世界は別々に存在するのではない、ゆえに両者は「相互作用」(interact)するのではなく「内的に行為」(intra-act)すると述べた(Barad, 2007)。バラードは、「相互作用」は「ばらばらな個体的エージェンシーが作用に先立って存在することを含意する」としてこれを退け、代わりに「あらかじめからまりあったエージェンシーがそうしたからまりあいの中でお互いを構成しあうあり方」として「内的な行為」という概念を用いた(飯盛, 2019, p.258)。

本稿での各参加者によるアートグラフィーを通して、歩くこと、写真を撮影すること、そしてそれを一つの文脈で語ることは、内的な行為を顕在化する萌芽となりえるのではないだろうか。参加者らが対象物を捉え、ファインダーをのぞき、シャッターを切るとき、数多の選択肢や可能性の中から、各参加者の関心や直感に基づいたある一部分が切り取られる。そこに写されたものは、部分でありながら複層的な認識やイメージの広がりを持ち、多くの意味を内包する一部分として切り取られる。しかし、歩く過程で見取り、撮影したものやことは撮影者本人にとっても完全に自覚的ではなく、論理的というよりは即興的であり、感覚や直感が多く含まれる。翻って、撮影された写真が含む曖昧さは、そのまま自己に向けられた問いにもなり得る。なぜその場所を撮影したのか、その場所が意味することは何か、撮影していくたびに自分の中の何が変化したか、撮影した複数の写真にはどのような繋がりがあるか、自分の写真はどのように芸術学、美術教育学、哲学等と関係するのか、他者と自分の撮影意図はどこが違うのか。3枚の写真の各対象と作者との複雑な有り様に目が向けられ、それが一つの文脈で語られるとき、人やもの、ことが織りなす内的な行為はその一端を見せる。それは他者との交流によってより複雑さを増す。

モサバルザデは、見えるものを撮影することで見え



ないものを見取ろうとし、森本は、重要な地点でありながらほとんどの人が通り過ぎる爆心地直下を訪れ、その行為や状況を美術教育と重ねて論じた。新井は、平和記念公園をもではなく時間や人々の想いによって蓄積された意味の重層として捉え、会田はこれまで感じていた「きねん」という用語の違和感に対し、その場所を歩き、感じ、発見する身体的行為を介して用語に対する新たな解釈を得た。そして生井は、水、空、炎という太古から変わらないものに含まれるゆらぎ、すなわち時間を見取り、同時進行で世界に内在される自分自身を見取ろうとした。

#### アートを取り入れた探究へ

本編のアートグラフィーは、各参加者が認識している複層的な問題意識や固有のテーマの中から、任意の文脈を選択し、論じている。換言すれば、各参加者は複数の多様な質の思弁を保留もしくは裁ち切りながら、選択した文脈に合致する内容のみを選択的に論じていた。この、捉えたすべてを提示できないある種の不完全燃焼感は、未処理のものとして残り続け、補完的な研究や別文脈の語りへ接続する“のりしろ”として探究的活動を継続、喚起するものと思われる。

近年、スマートフォンの普及やソーシャルメディア、画像共有アプリ等の発展により、子供達の日常生活でも写真を始めとしたビジュアルデータはますます身近になっている。教育現場でもタブレット等のICT機器の導入に伴い、写真や画像を媒介・手段とした教育内容や教育方法の開発は今後さらに促進されるだろう。このような状況において、本研究は次の発展可能性を含む。一つは探究過程にアートの手法を取り込むこと、そして探究の媒介として写真を用いることである。容易な手法でありながら子供の主観と対象世界との固有の関わりを実現し、その場所や環境に身体を介した新しい意味や文脈を発見し、ものとの、ものとの関係性を再認識・再構築・再生成する本活動は、学校教育現場においても有効であると考えられる。

(池田史志)

#### 【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 JP18K13160, JP18H01010, JP18H01007及び SSHRC (890-2017-0006) の助成を受けて実施・公表されました。

#### 【参考引用文献】

Barad, K. (2007). Meeting the universe halfway: Quantum physics and the entanglement of matter

and meaning. Durham, NC: Duke University Press.  
Eisner, E. W. (1979/1985). The educational imagination. New York: Macmillan.

Eisner, E. W. (1991). The enlightened eye: Qualitative inquiry and the enhancement of educational practice. New York: Macmillan.

ガブリエル, M 著, 清水一浩訳, (2018) 『なぜ世界は存在しないのか』, 講談社選書メチエ  
平和祈念展示資料館 HP, 2020.1.23閲覧

<https://www.heiwakinen.go.jp/about/index.html>

広島平和記念都市建設法 (広島市 HP), 2020.1.23閲覧  
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1391050531094/index.html>

飯盛元章 (2019) 「ポストヒューマニティーズの思想地図と小事典」『現代思想』Vol.47-1, pp.250-265, 青土社

インゴルド, T (2017) 『メイキング』, 左右社

Irwin, R. L. (2004). A/r/tography: A metonymic metissage. In M.R. Carter & V. Triggs (Eds). *Arts education and curriculum studies: The contributions of Rita L. Irwin* (pp.27-40). Vancouver: Pacific Educational Press.

Irwin, R. L., LeBlanc, B., Ryu, J. Y., & Belliveau, G. (2018). A/r/tography as living inquiry. In P. Leavy, *Handbook of arts-based research* (pp.37-53). New York, London: The Guilford.

LeBlanc, N., Davidson, S. F., Ryu, J. Y., & Irwin, R. L. (2015). Becoming through a/r/tography, autobiography and stories in motion. *International Journal of Education through Art*, 11(3), 355-374.

Leggo, C. (2012/2019). Challenging hierarchy: Narrative ruminations on leadership in education. In R.L. Irwin, E. Hasebe-Ludt, & A. Sinner (Eds.). *Storying the world: The contributions of Carl Leggo on language and poetry* (pp.38-49). New York: Routledge.

O'Donoghue, D. (2018). The promise of photography. In D. O'Donoghue, *Learning to live in boys' schools: Art-led understandings of masculinities* (pp. 64-84). New York: Routledge.

Springgay, S., Irwin, R. L., & Kind, S. W. (2005). A/r/tography as Living Inquiry Through Art and Text. *Qualitative Inquiry*, 11(6), 897-912.

Sullivan, G. (2006). Research Acts in Art Practice. *Studies in Art Education*, 48(1), 19-35.

Ungerleider, C. (2003). Failing our kids: How we are ruining our public schools. Toronto, ON: McClelland & Stewart.

Yurita, M., & Dornan, R. W. (2009). Hiroshima: Whose story is it? *Children's literature association quarterly*, 34(3), 229-240.